

平成 26 年度

## 病害虫発生予報第 4 号

平成 26 年 7 月 24 日

### 三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

## 目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス(ブドウ晩腐病について)	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

## 1. 向こう 1 か月の予報と対策

### 1) 作物

イネでは、斑点米カメムシ類の発生量は**多**と予想されます。薬剤散布は穂揃い期に行い、中山間など山沿いの地域では追加防除をしてください。白葉枯病、トビイロウンカの発生量は**平年並**、穂いもち、紋枯病、イネクロカメムシ、ツマグロヨコバイ、セジロウンカの発生量は**やや少**と予想されます。

ダイズでは、紫斑病、吸実性カメムシ類の発生量は**やや多**と予想されます。防除適期に薬剤散布を行ってください。コガネムシ類、ハスモンヨトウの発生量は**やや少**と予想されます。

### 2) 果樹

カンキツでは、黒点病、かいよう病(温州)、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマの発生量は**平年並**と予想されます。かいよう病(中晩柑)の発生量は**やや少**と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は**多**と予想されます。カンキツ、ナシ、カキ等での被害発生に注意し、圃場への飛来が認められたら直ちに防除してください。

### 3) 茶

チャでは、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノコカクモンハマキの発生量は**やや多**と予想されます。チャノミドリヒメヨコバイでは三番茶期の開葉初期に防除してください。チャノコカクモンハマキでは幼虫の発生状況に注意して防除してください。チャノキイロアザミウマの発生量は**平年並**、炭疽病の発生量は**やや少**、カンザワハダニの発生量は**少**と予想されます。

### 4) 野菜

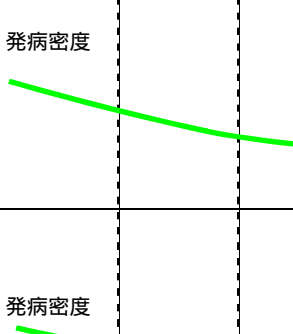
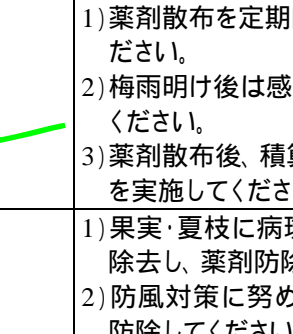
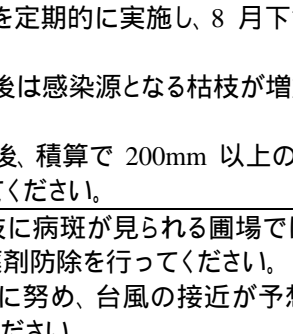
イチゴでは、炭疽病の発生量は**平年並**と予想されます。

農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

## 2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	—	やや少	中	普通	出穂 ↓	発病密度			1) 病害虫防除技術情報第8号(7月7日発表)。 2) 葉いもちが上位葉で発生している圃場では、感染の恐れがあります。発生状況に注意してください。 3) これから出穂期となる圃場において、薬剤散布する場合は、出穂始めから穂揃い期に実施してください。
	紋枯病	—	やや少	中	低	出穂 ↓	発病密度			1) 高温多湿条件で発病が助長されます。 2) 多肥、過繁茂の圃場では発生しやすくなります。 3) 薬剤散布は出穂7～10日前に実施してください。
	白葉枯病	—	平年並	小	低		発病密度			1) 常発地では、台風や集中豪雨の遭遇直後に薬剤散布してください。 2) 「みえのゆめ」は耐病性の弱い品種なので注意が必要です。
	斑点米カメムシ類	—	多	大	高	アカヒゲホソドリ リカスミカメ	アカスジカ スミカメ	ホソハリカメムシ シクモヘリカメムシ		1) 病害虫発生予察注意報第2号(7月7日発表)。 2) 薬剤散布は穂揃い期に実施してください。広域での一斉防除が効果的です。 3) 中山間など山沿いの地域では、穂揃い期防除の7～10日後に2回目の防除をしてください。 4) 平坦地域においても、防除後に発生が確認された場合は、2回目の防除を実施してください。 5) 周囲よりも出穂の早い水田および遅い水田では、被害が集中するので防除を徹底してください。
	イネクロカメムシ	—	やや少	小	低	被害量	誘殺密度			1) 発生圃場では、今後出すくみ穂や白穂被害が目立つようになります。 2) 常発地で薬剤散布する場合は、株元までかかるように行ってください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
							下旬	上旬	中旬	
イネ	ツマグロヨコバイ	-	やや少	中	低	成虫密度				1)9月上旬までに収穫する圃場では、実害はほとんどありません
	セジロウンカ	-	やや少	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
	トビイロウンカ	-	平年並	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
ダイズ	紫斑病	-	やや多	小	普通			発病密度		1)これから播種する圃場では、種子消毒を徹底してください。 2)莢が形成され始めたら、薬剤散布をしてください。
	コガネムシ類	-	やや少	中	普通	成虫密度				1) 通常は防除の必要はありませんが、多発する場合は加害初期に防除してください。 2)ヒメコガネとドウガネブイブイは夜行性の種のため、夕方に薬剤散布すると効果的です。
	ハスモンヨトウ	-	やや少	小	普通			被害量		1) 白変葉を目印に早期発見に努め、若齢幼虫期に防除して下さい。 2) 発生量が急増することがありますので、防除所ホームページにおいて、フェロモントラップでの誘殺状況に注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比 程度		要防除 圃場率 平年比	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	月上旬	中旬	下旬	
ダイズ	吸実性カメムシ類	-	やや多	中	普通			開花 ↓		<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 近年、ミナミアオカメムシによる被害粒の多発や、青立ち症状が増加しています。</li> <li>2) 薬剤散布は、9月中旬(開花 20 日後・莢伸長期)と 10 月上旬(開花 40 日後・子実肥大中期)の 2 回散布が効果的です。</li> <li>3) 遅くとも、9 月下旬(開花 30 日後・子実肥大初期)までに 1 回目の薬剤散布をしてください。</li> <li>4) 移動性が高いため、広域一斉防除が効果的です。</li> <li>5) エチプロール剤およびジノテフラン剤は、ミナミアオカメムシの殺虫効果が高いことが確認されています。</li> </ul>
カンキツ	黒点病	-	平年並	小	普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 薬剤散布を定期的を実施し、8 月下旬まで感染防止に努めてください。</li> <li>2) 梅雨明け後は感染源となる枯枝が増加するので、切除に努めてください。</li> <li>3) 薬剤散布後、積算で 200mm 以上の降雨があったら、次の防除を実施してください。</li> </ul>
	かいはよう病	-	温州 平年並	温州 小	温州 低	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 果実・夏枝に病斑が見られる圃場では、発病した枝・葉・果実を除去し、薬剤防除を行ってください。</li> <li>2) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。</li> <li>3) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。</li> </ul>
	ミカンハダニ	-	平年並	中	普通	成ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 1 葉当りの雌成虫寄生数が 0.5 ~ 1.0 頭程度を目安に防除してください。</li> <li>2) 高温により活動が停滞する時期ですが、圃場での発生状況をよく確認し、多発している場合は防除してください。</li> <li>3) 薬剤散布は葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。</li> <li>4) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避けてください。</li> </ul>

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項	
						7月	8月				
						下旬	月上旬	中旬	下旬		
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通		成虫密度				<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 寄生果率 10%になった時を防除の目安にしてください。</li> <li>2) 7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。</li> </ul>
果樹共通	カメムシ類	—	多	大	高		チャバナエオカメムシ	ツヤアオカメムシ			<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 圃場内を観察し、飛来が認められたら防除を実施してください。</li> <li>2) 圃場(特にナシ、カキ)によっては局所的に飛来してきます。過去に発生が多かった圃場周辺では注意してください。</li> <li>3) ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害されることがあります。</li> </ul>
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通		感染	発病	次の感染		<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 1葉期頃に葉の毛茸がとれた傷から感染します。</li> <li>2) 感染好適温度は 25℃～27℃です。</li> <li>3) 雨滴で菌が病斑部分から拡散して感染します。</li> <li>4) 三番茶の刈り落としも効果的です。</li> <li>5) 治療剤 (EBI 剤など) は耐性菌が出現しやすいため同一系統の薬剤の連用は避けましょう。</li> </ul>
	カンザワハダニ	—	少	小	低		成ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 年間 10 世代程発生します。現状は、旧葉裏に生息しています。</li> <li>2) 夏季の 30℃以上の高温条件下では、発生が抑制されます。</li> <li>3) 抵抗性の発達を避けるため、同一系統の薬剤の連用は避けましょう。</li> </ul>
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや多	中	普通		成虫密度				<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 年間 7 世代程発生します。新芽の先が褐変し、ひどいときは落葉します。</li> <li>2) 晴天が続くと発生が多くなります。</li> <li>3) 新芽の開葉初期に防除しましょう。</li> <li>4) 幼虫は葉裏に生息するので丁寧に防除しましょう。</li> </ul>
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通		成虫密度				<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 年間 7 世代程発生します。萌芽初期に新芽の基部から加害し、条痕となります。</li> <li>2) 晴天が続くと発生が多くなります。</li> <li>3) 多発園では、新芽の開葉初期に防除しましょう。</li> </ul>

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
						7月	8月				
						下旬	上旬	中旬	下旬		
チャ	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	小	普通	第2世代成虫					<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 病害虫防除技術情報第6号(6月30日発表)。</li> <li>2) 若齢幼虫期に防除しましょう。防除適期は成虫発生ピークから7日～10日頃です。</li> <li>3) 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。</li> </ol>
イチゴ	炭疽病	-	平年並	中	普通	発生密度					<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 発病株は感染源となるため、周辺株も含めて速やかに除去し、圃場外に持ち出して適切に処分してください。</li> <li>2) 薬剤による予防防除を徹底してください。葉かき作業後や降雨、台風等の前後は特に重点的に防除してください。</li> <li>3) 耐性菌の発生を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けてください。</li> <li>4) 病原菌を含む水滴の跳ね返りによって感染が拡大します。水滴が跳ね返らないよう、丁寧に灌水を行ってください。</li> </ol>

### 3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、葉いもちの発生圃場率4.4%(平年31.4%)と少、発病度0.2(平年3.2)と少、発病株における上位葉への進展率0%(平年1.3%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、葉いもちの発生量は少～平年並(概してやや少)。一部地域では多発を確認 (+)</p> <p>考察: 今後の気象条件、巡回調査結果および一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	紋枯病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月17日発表)によると、気温は平年並か高い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0.3%(平年10.4%)と少、発病株率0.01%(平年1.7%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考えられますが、今後の気象条件を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 台風8号の影響により、7月9～10日に大雨に遭遇 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並に少と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	-	多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 予察灯(松阪市・6月第1半旬～7月第3半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ238頭(平年60.2頭)と多、アカヒゲホソドリカスミカメ344頭(平年114.0頭)と多、クモヘリカメムシ3頭(平年0.2頭)と多の傾向 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、圃場内および畦畔イネ科雑草すくい取りによる、中型種(ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類)の発生地点率38.1%(平年34.3%)と多、すくい取り成幼虫数1.9頭(平年1.4頭)と多、微小種(アカスジカスミカメ)の発生地点率44.4%(平年24.3%)と多、すくい取り成虫数4.1頭(平年2.9頭)と多。ミナミアオカメムシ成幼虫の発生を県北中部で確認 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並～多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量は多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬～7月第2半旬)では、誘殺数は水田位置11頭(平年10.6頭)と平年並、畑位置257頭(平年300.3頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率20.0%(平年21.8%)とやや少、被害株率1.4%(平年3.3%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(6月第1半旬～7月第2半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置4頭(平年4.2頭)と平年並、松阪市・畑位置1029頭(7年平均4051.0頭)と少の傾向、伊賀市31頭(平年57.0頭)とやや少、紀北町3頭(平年6.2頭)とやや少、御浜町0頭(平年5.1頭)とやや少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率25.9%(平年30.2%)とやや少、払い落とし成幼虫数0.9頭(平年3.4頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウンカ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～7月第2半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置0頭(平年1.5頭)と平年並、松阪市・畑位置0頭(7年平均72.2頭)と少の傾向、伊賀市0頭(平年3.0頭)と平年並、紀北町7頭(平年13.3頭)と少、御浜町1頭(平年34.2頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、紀州地域では、発生圃場率3.6%(平年38.0%)と少、払い落とし成虫数0.04頭(平年1.7頭)と少、県全体では、発生圃場率0.3%(平年8.0%)と少、払い落とし成虫数0.003頭(平年0.9頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並に少) (±)</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、7月上旬まで多飛来の報告はなし (-)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況、他県の飛来状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	トビイロウンカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～7月第2半旬)では、県内4か所ともに未飛来(平年7月上旬まで未飛来) (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0%(平年0.1%)と平年並に少、払い落とし成虫数0頭(平年0.2頭)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並に少) (±)</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、7月上旬まで多飛来の報告はなし (-)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況、他県の飛来状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>



作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ダイズ	紫斑病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1)巡回調査圃場(昨年11月)では、紫斑粒の発生率1.8%(平年0.2%)と多 (+)</p> <p>考察： 昨年の紫斑粒発生状況から、本圃への感染源の持ち込みがやや多いと考えられ、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	コガネムシ類	-	やや少	<p>要因</p> <p>1)予察灯(松阪市・4月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数はドウガネブイブイ164頭(平年217.0頭)と少、ヒメコガネ45頭(平年65.2頭)とやや少 (-)</p> <p>2)県予察圃フェロモントラップ(5月上旬~7月上旬)では、誘殺数はマメコガネ90頭(平年205.5頭)と少、ドウガネブイブイ0頭(平年37.9頭)と少、ヒメコガネ2頭(平年11.7頭)と少 (-)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並に少) (±)</p> <p>考察： 予察灯およびフェロモントラップの誘殺状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1)県予察圃フェロモントラップ(6月第4半旬~7月第3半旬)では、誘殺数は菰野町181頭(8年平均210.1頭)とやや少の傾向、津市169頭(8年平均298.9頭)と少の傾向、松阪市嬉野川北町57頭(平年264.7頭)と少 (-)</p> <p>2)一般圃場では、発生量は無~少(概して平年並に少) (±)</p> <p>考察： フェロモントラップの誘殺状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1)予察灯(松阪市・6月第4半旬~7月第3半旬)では、誘殺数はイチモンジカメムシ204頭(平年37.3頭)と多、ミナミアオカメムシ水田位置4頭(4年平均0.5頭)とやや多の傾向、畑位置99頭(4年平均100.8頭)と平年並の傾向、クサギカメムシ345頭(平年97.7頭)と多 (+)</p> <p>考察： 予察灯の誘殺状況から、予想発生量はやや多と考えます。</p>
カンキツ	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1)1か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2)県予察圃(7月中旬)では、果実発病度29.3(平年30.7)とやや少 (-)</p> <p>3)巡回調査圃場(7月第2週)では、果実発病度1.8(平年1.4)と多 (+)</p> <p>4)一般圃場では、発生量はやや少~平年並(概して平年並) (±)</p> <p>5)感染源となる枯枝は平年並 (±)</p> <p>考察： 一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	-	温州 平年並  中晩柑 やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬、新甘夏)では、発病葉率0%(平年9.4%)と少、発病果率0%(平年20.5%)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、温州みかんは発病葉率0%(平年0.7%)と少、発病果率0%(平年0.09%)と平年並、中晩柑は発病葉率1.3%(平年12.2%)と少、発病果率0.3%(平年2.5%)と少 (温州±、中晩柑-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察：温州みかんでは現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。中晩柑類では現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100 葉当り寄生頭数は慣行防除区で12.2 頭(平年3.4 頭)と多、無防除区では3.3 頭(平年12.6 頭)と少 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率46.2%(平年38.5%)と多、新葉における寄生葉率7.2%(平年8.1%)と平年並、寄生頭数0.17 頭/葉(平年0.34 頭/葉)と少 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(7月上旬)では、誘殺数44 頭/日(平年2.6 頭/日)と多 (+)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100 果当り寄生虫数4.2 頭(平年11.5 頭)とやや少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、被害果率0.2%(平年1.2%)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：一般圃場での発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹 共通	カメムシ類	-	多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:7月1日~7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 1,120 頭(平年 2,747 頭)とやや少、ツヤアオカメムシ 36 頭(平年 18.6 頭)と多 (-)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月21日~7月20日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 1,285 頭(平年 676.6 頭)と多、ツヤアオカメムシ 234 頭(平年 314.7 頭)とやや少、クサギカメムシ 411 頭(平年 142.7 頭)と多 (+)</p> <p>3) フェロモントラップ(6月17日~7月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は山地(津市白山町川口)で 1,221 頭(平年 875.2 頭)と多、中間地(津市白山町二本木)で 2,396 頭(平年 1,605.1 頭)と多、平地地(松阪市嬉野川北町)で 242 頭(平年 383.2 頭)とやや少 (+)</p> <p>4) 巡回調査圃場(7月第2週)では、カンキツ圃場での叩き落とし虫数 0.2 頭(平年 0.01 頭)と多、カキ圃場での被害果率 6.0%(平年 0.3%)と多 (+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は多 (+)</p> <p>考察: 巡回調査結果及び一般圃場での発生状況から、現状の発生量は多と考えられ、引き続き予想発生量は多と考えます。</p>
	炭疽病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃では、二番茶期の病葉数 0 枚 / m<sup>2</sup>(9年平均 0.6 枚 / m<sup>2</sup>)と少の傾向 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発病葉数 1.7 枚 / m<sup>2</sup>(平年 3.1 枚 / m<sup>2</sup>)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、寄生葉率 0%(平年 2.1%)と少、寄生頭数 0 頭 / 葉(平年 0.07 頭 / 葉)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、寄生葉率 0%(平年 0.3%)と少、寄生頭数 0 頭 / 葉(平年 0.01 頭 / 葉)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考えられ、引き続き予想発生量は少と考えます。</p>
チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第3半旬~7月第3半旬)では、捕殺数 41 頭(平年 12.8 頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、叩き落とし虫数 3.1 頭(平年 2.1 頭)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>	

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第3半旬~7月第3半旬)では、捕殺数 6720 頭(平年 7918.6 頭)とやや少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、叩き落とし虫数 5.6 頭(平年 29.9 頭)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(6月第3半旬~7月第3半旬)では、誘殺数 970 頭(平年 397.8 頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、ハマキムシ類巻葉数 0 枚/m<sup>2</sup>(平年 0.4 枚/m<sup>2</sup>)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、ハマキムシ類の発生量は多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月17日発表)によると、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週、親株)では、発病株率 0%(平年 0.4%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~やや少(概して少)だが、一部で発病を確認 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は少と考えられますが、気象要因による今後の増加を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

## 4. 予察項目の見方

### 1) 「作物別の状況」の見方

**発生時期(平年比)：** 平年の発生日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価	早	やや早		平年並				やや遅			遅			

**発生量(平年比)：** 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

**発生量(程度)：** 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

**要防除圃場率(平年比)：** 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

**発生消長の一例：** 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

**防除の注意事項：** 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

### 2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

## 5. 今月のトピックス「ブドウ<sup>おそぐされ</sup>晩腐病について」

### 晩腐病とは

晩腐病は図1のように果粒が収穫期になって腐るように発病し、ミイラのような難防除病害の1つです。

### 感染のしくみ

病原菌は、結果母枝・巻きひげ・果梗の切り残しなどの組織内で菌糸の形態で越冬します。平均気温が 15℃ 以上になり降雨で枝が十分にぬれると孢子形成が始まり、孢子の形成・飛散は梅雨期に最も盛んとなります。越冬病原菌から果房への第一次伝染は6月初旬から7月中旬頃で、雨滴によって飛沫感染します。

感染した果房は長い潜伏期間を経て成熟期に発病し、第二次伝染を引き起こした後、結果母枝・巻きひげ・果梗の切り残しなどで越冬し、翌年の感染源になります。



図1 晩腐病による発病果

### 防除のポイントと注意事項

果実に酸が多く pH が低いと病斑は形成しにくいので、幼果期に感染するとほとんどは潜伏します。長い潜伏期間を経て発病するので、成熟期に発病を見た時には既に遅く、第一次伝染を防止することが最も重要です。また、薬剤だけでは防ぎきれないので、耕種的防除と組み合わせる必要があります。

#### 耕種的防除

- 1) 剪定時に、果梗の取り残しや巻きひげをとりましょう。
- 2) 降雨による果実感染を防止するため、袋かけは6月下旬～7月上旬までに終了しましょう。

#### 薬剤防除

- 1) 休眠期散布は、動噴の圧力を下げ、ていねいに散布しましょう。
- 2) 果粒を汚すことがあるので、薬剤の選択や時期に注意しましょう。

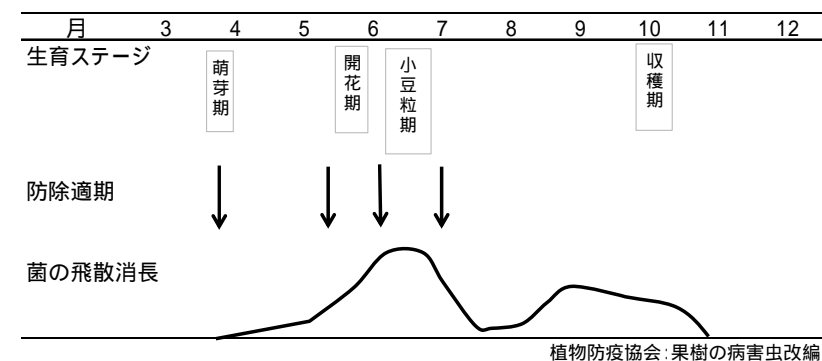


図2 晩腐病の発生消長と主要防除時期

## 6. 気象のデータ

### 東海地方1か月予報(平成26年7月17日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう1か月気温は、平年並か高いでしょう。天候は、太平洋高気圧に覆われて、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

1週目 7月19日～25日	期間の中頃にかけて梅雨前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。終わりは高気圧に覆われて概ね晴れる見込みです。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 2.3日・4.1日
2週目 7月26日～8月1日	太平洋高気圧に覆われて、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。	同 2.0日・4.7日
3～4週目 8月2日～15日	太平洋高気圧に覆われて、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。	同 3.9日・9.5日

### 東海地方週間天気予報(平成26年7月23日10時30分 名古屋地方気象台発表)

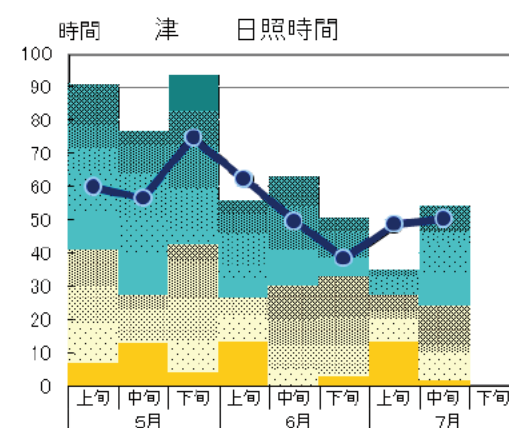
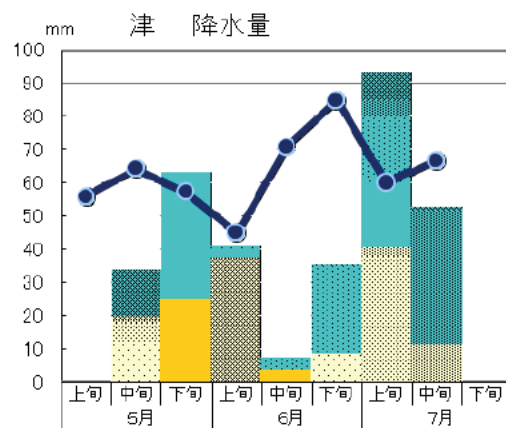
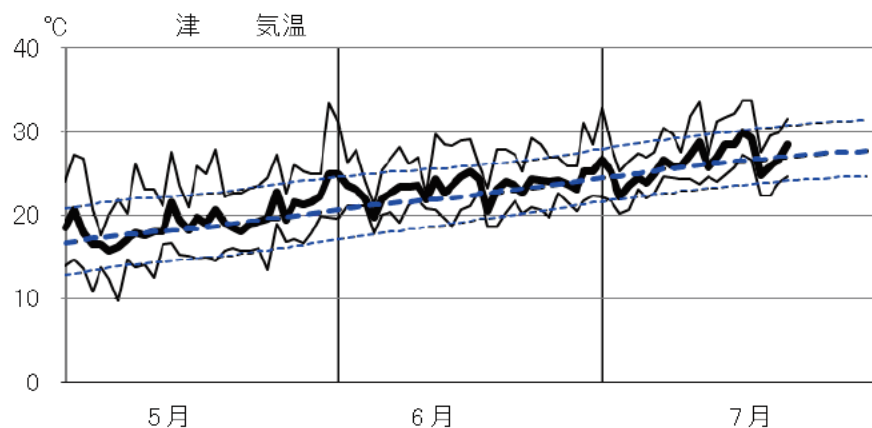
予報期間 7月24日～7月30日

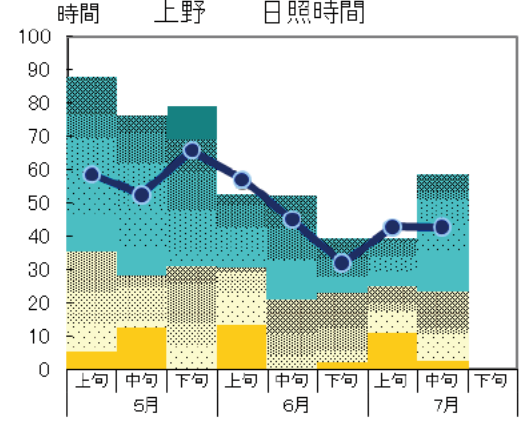
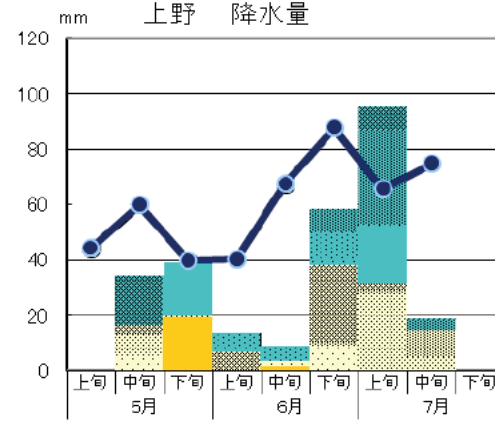
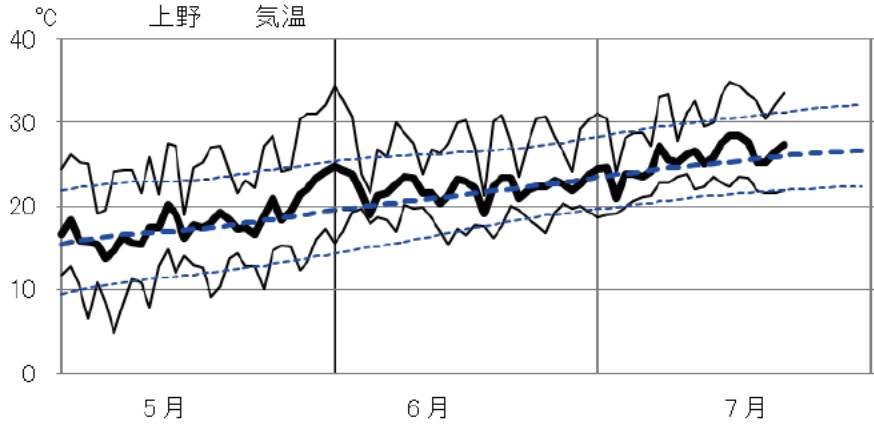
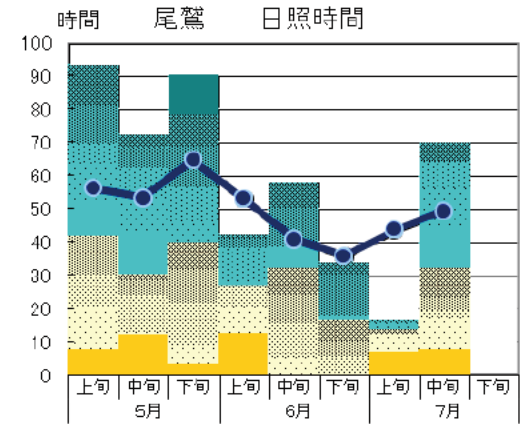
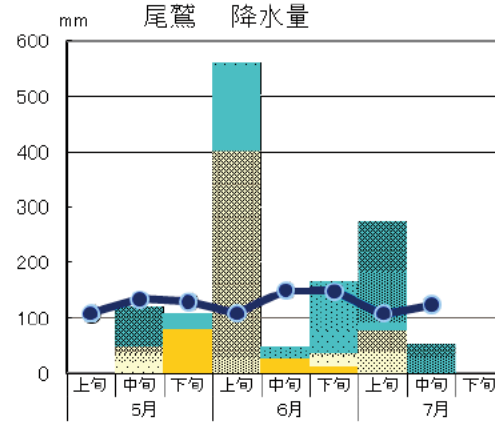
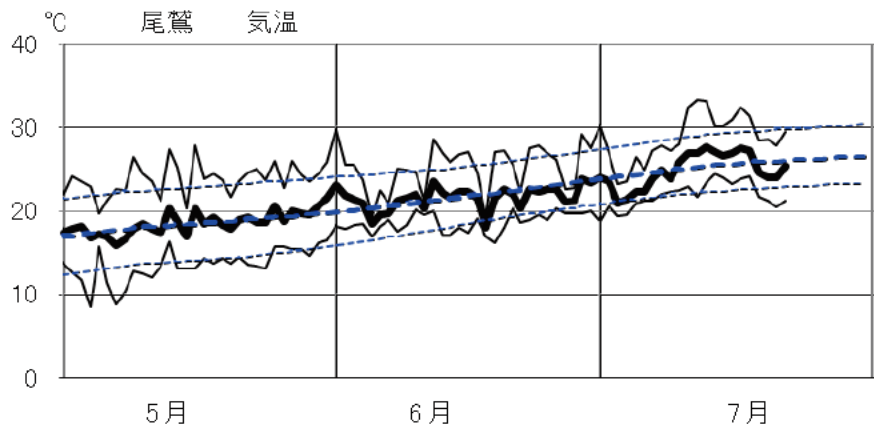
向こう一週間は、期間の中頃にかけて高気圧に覆われて概ね晴れますが、終わりは湿った気流の影響で雲が広がりやすいでしょう。

最高気温と最低気温はともに、期間の前半は平年より高く、後半は概ね平年並の見込みです。

降水量は平年より少ないでしょう。

### 気象の日別推移(気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (7月22日まで)





凡例

- 平均
- 最高
- 最低
- - - 平年平均
- - - 平年最高
- - - 平年最低

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平年値

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平年値



## 7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

### 1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

### 2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

第1回 4月24日(木)(済み) 第2回 5月29日(木)(済み)

第3回 6月26日(木)(済み) 第4回 7月24日(木)(今回)

第5回 8月28日(木) 第6回 10月23日(木)

第7回 3月19日(木)

### 3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

### 4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアド

レスからお入りください。

[http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h26yohotebiki\\_.pdf](http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h26yohotebiki_.pdf)

### 5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

### 6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

[http://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)

### 7) IPM(総合的病害虫・雑草管理)実践指標について

三重県では IPM を実践する上で必要な農作業の具体的な取組内容を示した作物別の指標を公表しています。農業者の皆さんの取組について、現状把握と今後の気づきにご活用ください。病害虫防除所ホームページにリンクを設定しています。

三重県農林水産部農産物安全課ホームページ内

<http://www.pref.mie.lg.jp/NOAN/HP/work/ipm/main.htm>